

PROFILE



マリー・ピエール・ソウマ

Marie-Pierre SOMA, Piano

パリ・エコール・ノルマル音楽院室内楽科教授。ピアニスト。作曲家。渡欧した音楽家の両親のもとフランスで生まれ、幼少のころより父親からピアノの手ほどきを受ける。17歳でオーケストラと協演。ソロ、室内楽、オーケストラ奏者として、フランス国内の音楽祭(サン・テニアン音楽祭、ソー公園オランジュリー音楽祭、ピアノ・ヴァール音楽祭など)への出演や、テレビやラジオの録音に参加するなど様々な分野で演奏活動を続けている。その活動はフランス国内にとどまらずスペイン、ベルギー、ハンガリー、ドイツ、アメリカ、日本、台湾など各地でコンサートを行っている。

特に古典派におけるピアノ作品を得意とし、ベートーヴェンのピアノソナタ32曲全曲演奏会や、バッハのクラヴィアのための協奏曲13曲全曲演奏会をフランス各地で開催し好評を得る。

またフランス女性作曲家協会会長をつとめ作曲活動をするとともに、主に19世紀、20世紀の埋もれた作曲家の作品を紹介するなど研究活動にも力を入れている。

長年にわたりパリ・エコール・ノルマル音楽院室内楽科の教授をつとめ後進の指導にも尽力している。



中村 ゆかり

Yukari Nakamura, Violin

1985年生まれ。3歳よりバイオリンを始める。1998年 江藤俊哉バイオリンコンクール第2位。東京藝術大学音楽学部付属音楽高等学校卒業。パリ・エコール・ノルマル音楽院 バイオリン科、室内楽科のコンサートディプロム取得。パリ国立地方音楽院(CNR)を満場一致の首席で卒業。パリ国立高等音楽院(CNSMDP)バイオリン科修士課程を卒業、国家ディプロム取得。2009年 サクソナ国際室内楽コンクール第3位。2010年 仏のカシオペ(Cassiopee)からヴィエルのバイオリンソナタをソウマ先生とCD録音し発売予定。

いままでに神奈川フィルハーモニー管弦楽団、ドミニク・ルイツ指揮するパリのマシーオペラ管弦楽団と共演。本年はジョン・ミョンフンが音楽監督を務めるフランス放送新フィルハーモニー管弦楽団に出演。そのほか国内外で多数の演奏会出演。最近では映画、「のだめカンタービレ最終楽章」の清良演じる水川あさみの吹替出演でブラームスのバイオリン協奏曲をパリで熟演し好評を得ている。

これまでに篠崎功子、田中千香子、ジェラルド・ブーレ、シルヴィー・ガゾー、室内楽をアミー・フラメル、マリー・ピエール・ソウマに師事。



井伊 準

Hitoshi Ii, Cello

1986年生まれ。4歳でピアノを始める。6歳でヴァイオリンを始めるが、11歳で岡山市ジュニアオーケストラの団員となり、チェロに転向する。

2003年 第3回泉の森ジュニアチェロコンクール銀賞。2004年 第4回泉の森ジュニアチェロコンクール銀賞。2007年 第12回KOBEL国際学生音楽コンクール最優秀賞、ならびに兵庫県教育賞。2010年 バルレッタ国際音楽コンクール(イタリア)室内楽部門第1位。アレクサンドル・グラスノフ国際音楽コンクール(フランス)チェロ部門第1位。

国内外のマスタークラスに参加し、K.ヘンケル、T.ヴァルガ、M.ペレーニ、P.ミュレルなどのレッスンを受ける。

東京藝術大学音楽学部卒業。フジテレビと(財)国際文化交流協会共同事業による奨学生として、パリ・エコール・ノルマル音楽院に留学、ディプロムを取得。

これまでに、山本栄子、松下修也、河野文昭、G. Teulieres-Sommerの各氏に師事。現在、ソロ・室内楽・オーケストラ奏者として活動中。

パリ・エコール・ノルマル 教授
マリー・ピエール・ソウマ
ピアノ演奏会

2010年9月9日(木) 19:00 ムジカーザ

井伊 準(チェロ)
中村 ゆかり(バイオリン)

Marie-Pierre
SOMA
PIANO CONCERT

PROGRAM

1

Cello Sonata in D minor - Pierre de Breville

PIANO マリー・ピエール・ソウマ
CELLO 井伊 準

チェロソナタ 二短調

ピエール・ド・ブレヴィユ

- I. Agitate and violent
- II. Quick and light
- III. Andante
- IV. Enough enliven

2

Cello Sonata No.2 in G minor - Ludwig van Beethoven

PIANO マリー・ピエール・ソウマ
CELLO 井伊 準

チェロソナタ第2番 ト短調 作品5-2

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーベン

- I. Adagio sostenuto e espressivo - Allegro molto più tosto presto
- II. Rondo. Allegro in G major

INTERMISSION

(15 minutes)

3

Sonata for Violin and Piano, op.23 - Louis Vierne

PIANO マリー・ピエール・ソウマ
VIOLIN 中村 ゆかり

バイオリンとピアノソナタ 作品23

ルイ・ヴィエルヌ

- I. Allegro
- II. Andante
- III. Intermezzo: Quasi vivace
- IV. Largamente: Allegro agitato

PROGRAM NOTE

ピエール・ド・ブレヴィユ

チェロソナタ 二短調

Pierre de Breville ピエール・ド・ブレヴィユ(1861~1949)はフランスの作曲家。

両親の願いで法律を学び外交官になる数年後、彼はパリ音楽院に入るために音楽の勉強を始め、セザール・フランクに作曲を師事する。パリ音楽院の室内楽の教授で、並びに音楽評論家としても活動する。



ブレヴィユ(左)

彼の作品は多作ではないが、非常にすばらしい感度、優雅さと技術を明らかにした作品が多く、非常に独創的な作品を残した。

とりわけ楽式を尊重した洗練された作曲様式を身に着けていた。

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーベン

チェロソナタ第2番 ト短調 作品5-2

Ludwig van Beethoven(独)ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーベン(1770-1827)は、ドイツの作曲家。クラシック音楽史上極めて偉大な作曲家の一人とされる。その作品は古典派音楽の集大成かつロマン派音楽の先駆けとされている。

1770年12月17日ごろ、神聖ローマ帝国ケルン大司教領(現ドイツ領)のボンで父ヨハン、母マリア・マグダレーナの長男として生まれる。ベートーヴェン一家はボンのケルン選帝侯宮廷の歌手(後に楽長)であり、幼少のベートーヴェンも慕っていた祖父ルートヴィヒの支援により生計を立てていた。ベートーヴェンの父も宮廷歌手であったが無類の酒好きであったため収入は少なく、1773年に祖父が亡くなるなど生活は困窮した。1792年7月、ロンドンからウィーンに戻る途中ボンに立ち寄ったハイドンに才能を認められ弟子入りを許可され、11月にはウィーンに移住し(12月に父死去)、まもなく、ピアノの即興演奏の名手(ヴィルトゥオーゾ)として名声を博した。20歳代後半ごろより持病の難聴(原因については諸説あり)が徐々に悪化、26歳の頃には中途失聴者となる。音楽家として聴覚を失うとい

う死にも等しい絶望感から、1802年には『ハイリゲンシュタットの遺書』を記し自殺も考えたが、強靭な精神力をもってこの苦悩を乗り越え、再び生きる意思を得て新しい芸術の道へと進んでいくことになる。1804年に交響曲第3番を発表したのを皮切りに、その後10年間にわたって中期を代表する作品が書かれ、ベートーヴェンにとっての傑作の森(ロマン・ロランによる表現)と呼ばれる時期となる。40代に入ると、難聴が次第に悪化し、晩年の約10年はほぼ聞こえない状態にまで陥った。また神経性といわれる持病の腹痛や下痢にも苦しめられた。加えて、非行に走ったり自殺未遂を起こすなどした甥カールの後見人として苦悩するなどして一時作曲が停滞したが、そうした苦悩の中で作られた交響曲第9番や『ミサ・ソレムニス』といった大作、ピアノ・ソナタや弦楽四重奏曲等の作品群は彼の未曾有の境地の高さを示すものであった。1826年12月に肺炎を患ったことに加え黄疸も発症するなど病状が急激に悪化、病床に臥す。10番目の交響曲に着手するも未完成のまま翌1827年3月26日、56年の生涯を終えた。その葬儀には2万人もの人々が駆けつけるという異例のものとなった。

ベートーヴェンのチェロ・ソナタは初期(2曲)・中期(1曲)・後期(2曲)の各時期を代表する傑作で、ベートーヴェンの室内楽では弦楽四重奏曲に次ぐ成功をおさめた作品群として有名である。

初期の作品の1番と2番は同時期、1796年に作曲されている。

チェロソナタ第2番はチェロソナタ第1番と同じく、ウィーンからプロイセンにかけて旅行中の1796年の半ばに作曲され第1番の完成後、作曲に着手し、おそらく短期間で作曲されたと推測されている。初演は同年ベルリンで高名チェロ奏者デュポール兄弟のチェロとベートーベンのピアノで行われた。

第1番よりひときわすぐれた内容を備えており、流麗な美しさが全曲にみられる。チェロの用法はほかではあるが、第1番より高い音域を使っている。

構成は2楽章。

第1楽章 アダージョ・ソステヌート・エド・エスプレッシヴォアレグロ・モルト・ビウ・トスト・プレスト

ソナタ形式で、アダージョ・ソステヌート・エド・エスプレッシヴォの長大な序奏(ト短調、4分の4拍子)と、アレグロ・モルト・ビウ・トスト・プレ

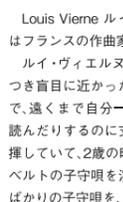
トの主部(ト短調、4分の2拍子)から構成されており、当時のソナタの冒頭楽章としては、第1番の第1楽章と並んで異様なほど長大である。

第2楽章 アレグロ(ロンド) ト長調

ロンド形式で、歌ったり、憂鬱な雰囲気になると曲想が変化する楽章である。

ルイ・ヴィエルヌ

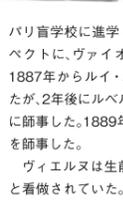
バイオリンとピアノソナタ 作品23



Louis Vierne ルイ・ヴィエルヌ(1870~1937)はフランスの作曲家。

ルイ・ヴィエルヌは先天性の白内障のため生まれつき盲目に近かったが、7歳になるまでは、日常生活で、遠くまで自分一人で行くことが、大きな活字を読んだりするのに支障はなかった。早熟な楽才を発揮して、2歳の時に初めてピアノを聴き、シューベルトの子守唄を演奏してもらったところ、聴いたばかりの子守唄を、即座にそれで弾いてみせた。

1880年よりパリでアンリ・スベクトにピアノ教育を受ける。同年パリの聖クロティルド教会で、セザール・フランクのオルガン演奏を初めて聞いた。当時の生活を後年ヴィエルヌは回想録の中で「捧げもの」と呼んだ。1881年に国立



パリ音楽院に進学し、ピアノを引き続きアンリ・スベクトに、ヴァイオリンをアンリ・アダンに師事。1887年からルイ・ルベルにオルガンの指導を受けたが、2年後にルベルが歿するとアドルフ・マルティに師事した。1889年にセザール・フランクにフーガを師事した。

ヴィエルヌは生前、最も偉大な即興演奏家の一と看做されていた。即興演奏の少ない録音が遺されているが、あとも完成され、推敲された楽曲を演奏しているかのようである。

ヴィエルヌは、とりわけ楽式を尊重した、精緻で洗練された作曲様式を身に着けていた。和声言語はいかにもロマン派音楽らしく豊かだが、旧師セザール・フランクほど感傷的でも劇的でもない。すべての19世紀末フランスのオルガニストの中で、ヴィエルヌの音楽がおそらく最もオルガン向きの表現を体系化しており、続く世代のパリの偉大なオルガニスト兼作曲家の大半を啓発した。

パリから素敵なピアニストをお迎えしました

